観光ぶどう園の空間構成の実態把握　～山梨県甲州市勝沼を対象として～

山梨大学工学部土木環境工学科 学生会員 ○内田 育美
山梨大学大学院医学工学総合研究部 正会員 大山 勲

１．はじめに

（１）背景

近年、景観整備において地域の個性が重視されている。しかし現状では、景観保全のための誘導・規制策が十分とは言えないため、美しい景観の喪失が懸念される。

勝沼町の景観は、ぶどう畑や農家の雰囲気など、落ち着いた農村景観を持っている。それは快適な空間を演出し、重要な資産である。一方、観光ぶどう園が多数あり、それも 1 つの景観の特徴となっている。しかし、観光ぶどう園の現状は、主要道路沿いに点在し、観光客を呼び寄せるための利益追求型の形態となっており、乱雑な景観を印象付け、それが町全体の景観を損ねている。また、これまでに観光ぶどう園の景観や、空間の特徴に関する研究はなされておらず、その実態は明らかになっていない。

（２）目的

町並み景観をつくる勝沼町らしい観光ぶどう園の今後を考えるための基礎的知見を得るために、観光ぶどう園の空間の構成要素を抽出し、その特徴を明らかにすることを目的とした。

（３）方法

研究対象となる観光ぶどう園の空間の写真を撮り、その空間の構成要素を抽出して、それを基に観光ぶどう園を分類し、その特徴を把握する。ぶどう狩りシーズン以外では、観光ぶどう園は営業していないので、本来の観光ぶどう園の構成要素を把握するため、2006 年 7 月～10 月にかけてのぶどう狩りシーズン中の景観を対象とする。

２．研究対象

（１）対象地

本研究の対象地は、山梨県甲州市勝沼町とする。

勝沼町は、甲府盆地の東縁に位置する。町の中央を甲州街道が走り、昔も今も交通の要衝である。現在、国道 20 号、中央自動車道が東西に、JR 中央本線が南北に通る。勝沼町は、全国有数のぶどうの生産地であり、多数の観光ぶどう園がある。

図 1. 山梨県地図

（２）対象とした観光ぶどう園

勝沼ぶどう郷観光協会が 2006 年 7 月 20 日に発行した、「ぶどう郷散策マップ」に掲載されている勝沼町内の観光ぶどう園 125 件のうち、調査時に営業されていた 123 件を対象とする。対象とする観光ぶどう園の空間は、マップに掲載されている場所で、受付や売店がある敷地の空間とする。

３．観光ぶどう園の歴史

観光ぶどう園の歴史[1)]を整理したものを表 1 に示す。

表1. 観光ぶどう園の歴史

年号	勝沼町の時代背景	観光ぶどう園の形態と内容
大正	・大正11年に観光ぶどう園が始まった	・ぶどう見学(眺めたり、味わう事を重視していた)
昭和初期	・政治家、高級官僚、職業軍人達に遊山の風習があった	・看板女優が来て以来観光ぶどう園という名称が定着した ・ぶどう園では、歓迎するためにアーチを建てる
戦後	・食料不足となる	・ぶどう畑に、芋や麦や南瓜を植え、ぶどう園は荒廃した
昭和20年代	・世情が安定し休養とロマンを求める人々が出てきた	・開業する園が増加し、東京のバス会社や各駅への客の誘致を行った
昭和33年	・国道二十号線が開通した	・自らの手で葡萄狩りをする ・観光客が家族でくるようになり、今の形態の基となった ・観光ぶどう園への主な交通手段が鉄道の使用から、自動車に変化した
昭和38年	・町の南部を勝沼バイパスが開通した事で、甲州街道は、荒廃した	・勝沼観光協会がスタート ・新しいタイプの観光ぶどう園が発生（バーベキューホールを新築、玄関口を拡張、休憩所を増築）
昭和57年	・中央高速道、勝沼-昭和間が完成し、全線開通となった	・観光客が増加した

キーワード　観光ぶどう園、空間構成、景観
連絡先：山梨大学 工学部 土木環境工学科　〒400-8511　山梨県甲府市武田 4-3-11

観光ぶどう園は、勝沼町の時代背景に伴いその形態と内容を変化してきた事が分かる。車利用の観光客を目当てとする、現在の観光ぶどう園の形態は、昭和 30 年代から始まったとみられる。

４．観光ぶどう園の特徴把握

（１）構成要素の抽出

現地調査により、観光ぶどう園の構成要素を抽出し、以下のような結果が得られた(表 2)。

表2．観光ぶどう園の構成要素

構成要素	該当数(件)	構成比(%)
母屋	85	69
売店	107	87
ぶどう棚	112	91
看板・のぼり	122	99
椅子・テーブル	25	20

※椅子・テーブルは、観光ぶどう園内の屋外にあるもののみを対象とした。

表 2 より、駐車場・庭を覆うぶどう棚や売店を持つものが約 90%、看板・のぼりがあるものは、ほぼ 100%であり、観光ぶどう園の景観を構成している主要な構成要素となっている。

（２）構成要素の組み合わせによるタイプ分類の把握

表 2 の構成要素のうち、売店、ぶどう棚、母屋の 3 つの要素の組み合わせにより観光ぶどう園の形態を分類した(表 3)。母屋とぶどう棚、作業場などの付属物で構成される一般的なぶどう農家と似た形態のものを「農家型」、この「農家型」に売店が含まれているものを「店舗農家型」、母屋と売店の組み合わせを「家型」、ぶどう棚と売店の組み合わせを「畑型」とし、単独の構成要素は、「その他」とした。その結果を表 3 に示し、その構成比を図 2 に示した。

表3．観光ぶどう園の構成による類型

タイプ		構成要素
1	店舗農家型	母屋＋ぶどう棚＋売店
2	畑型	ぶどう棚＋売店
3	農家型	母屋＋ぶどう棚
4	家型	母屋＋売店
5	その他	売店、ぶどう棚、母屋のみ

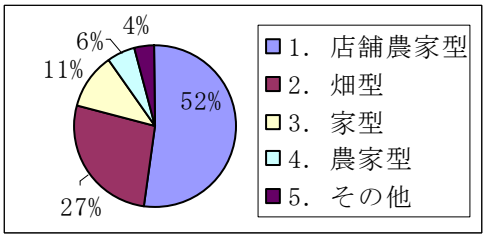


図 2．観光ぶどう園のタイプ

図 2 より、タイプの傾向として、「店舗農家型」が過半数を占め、「家型」「農家型」と合わせると 7 割を占める。元々あったぶどう農家に売店を設置し、観光ぶどう園にした事が考えられる。「畑型」は、車の観光客を呼び込む事を目的として、主要道路沿いの畑に売店を置き、観光ぶどう園にしたものと考えられ、3 割を占める。

（３）敷地配置

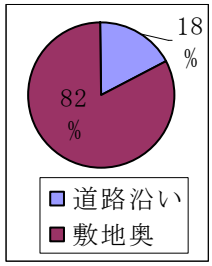
さらに、母屋、売店の 2 つの配置に着目して、敷地配置を分類した（表 4)。また、母屋と売店が道路沿いにあるか敷地奥にあるかで分け、その配置の割合を、図 3、図 4 に示した。

表4．敷地配置の分類

タイプ	分類	配置図	特徴	該当数(件)	構成比(%)
1	1 - 1		母屋は敷地奥で、売店は道路沿いに配置。	50	41
	1 - 2		母屋、売店ともに道路沿いに配置。	5	4
	1 - 3		母屋は道路沿い、売店は敷地奥に配置。	3	2
	1 - 4		母屋、売店ともに敷地奥に配置。	6	5
2	2 - 1		売店は道路沿いに配置。	27	22
	2 - 2		売店は敷地奥に配置。	6	5
3	3 - 1		母屋は道路沿いに配置。	4	3
	3 - 2		母屋は敷地の奥に配置。	9	7
4	4 - 1		母屋、売店ともに道路沿いに配置。	3	2
	4 - 2		母屋は敷地奥で、売店は道路沿いに配置。	3	2
5	5 - 1		売店は道路沿いに配置。	2	2
	5 - 2		売店は敷地奥に配置。	2	2
	5 - 3		ぶどう棚のみ	1	1
	5 - 4		母屋を敷地奥に配置。	2	2

※配置図下側を道路とする。

配置図凡例
ぶどう棚　母屋　売店
その他(駐車場、庭など)



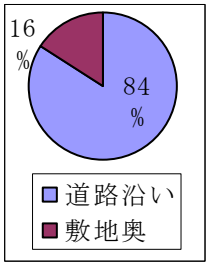


図 3．母屋の配置構成比　図 4．売店の配置構成比

図 3、図 4 より、母屋は敷地奥に、売店は道路沿いに配置される傾向が強いことが分かる。

最も多い敷地配置(表 4 の 1-1)と農家の敷地配置[2)]は似た配置となっている(図 5)。観光ぶどう園の敷地配置は、元々のぶどう農家の敷地配置を引き継いでいると思われるが、農家の敷地配置が方位に規定されるのに対して、観光ぶどう園の場合は、道路の南が東西に面する敷地も同じ形態である事から、客を呼び込むために新たに作られたものも多いと考えられる。伝統的ぶどう農家の雰囲気は写真 1 のように、棚が低く、駐車スペースも小さく、母屋と庭と付属屋が結びついた落ち着きある景観をしている。

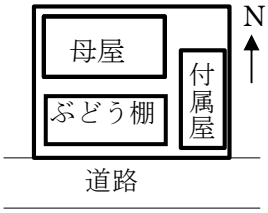


図 5. 農家型の敷地配置

写真 1. 伝統的ぶどう農家

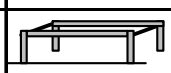
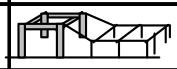
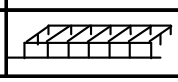
(4)ぶどう棚の特徴

庭、駐車場を覆うぶどう棚を支柱高、支柱色彩、構造に着目して分類した。

1）ぶどう棚の支柱高

支柱高の高さを、バスの乗り入れ可能かどうかで、分類した。バスの乗り入れ可能な高さを A、伝統的ぶどう農家と同じ程度に低く、バスの乗り入れ不可能な高さを C とし、A の支柱と C の支柱を併せ持つものを B とした。構造例を表 5 にまとめて、支柱高の割合を図 6 に示した。

表5. ぶどう棚の支柱高の分類

支柱高	構造図	写真No	該当数(件)
A		写真2	88
B		写真3	19
C		写真4	5

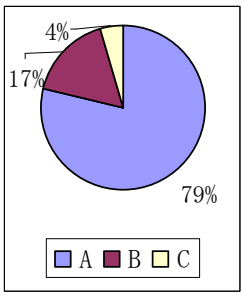


図 6. ぶどう棚の支柱高の構成比

写真 2. 支柱高 A の例

写真 3. 支柱高 B の例

写真 4. 支柱高 C の例

2）ぶどう棚の構造

ぶどう棚の構造は、柱の少ない空間を作る鉄筋トラスや、吊り構造など(表 6 で鉄筋)と、畑と同じように支柱間隔の狭いコンクリート杭の構造(表 6 で杭)に分類した。その構成比を図 7 に示した。

表 6. ぶどう棚の構造の分類

構造	該当数(件)
鉄筋	95
杭	5
鉄筋＋杭	12

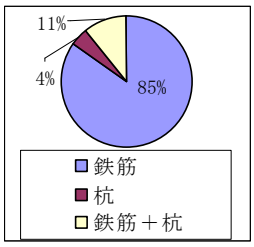


図 7. ぶどう棚の構造の構成比

3）ぶどう棚の支柱の色彩

ぶどう棚の支柱の色彩の構成と構成比を示した。(表 7、図 8)

表 7. ぶどう棚の支柱の色彩の分類

色彩	該当数(件)
シルバー	86
茶	8
緑	6
赤	4
水色	3
グレー	5

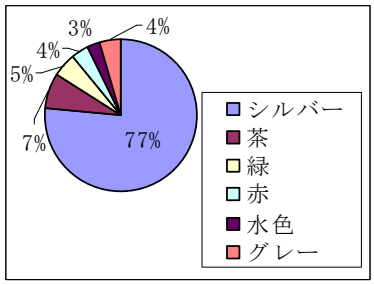


図 8. ぶどう棚の支柱の色彩の構成比

一般的な農村のぶどう畑では、コンクリートなどの杭(過去は木)が主流であるが、観光ぶどう園のぶどう棚に杭はほとんどない。また、ぶどう棚の支柱の色彩は、シルバー、緑、赤、青等の際立った色合いが用いられている。

ぶどう棚の構造と支柱高の特徴から、バスが入れる高さの支柱高 A と、広い駐車空間を確保できる鉄筋構造(支柱間隔が広いので)が、勝沼町の観光ぶどう園では、一般的になっている。

(5)売店の特徴

道路沿いに配置されている売店を抽出し、道路の進行方向に向かって手前か奥(図 9)に分類し、表 8 に示した。

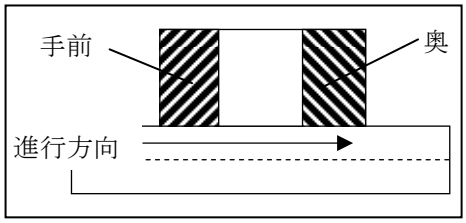


図 9. 売店の配置

表8. 道路沿いの売店の配置の構成比

配置	該当数(件)	構成比(%)
進行方向に向かって奥	69	77
進行方向に向かって手前	21	23

写真 5. 売店

売店の配置は、車からの視認性が高くなるので、写真 5 のように、車の進行方向に向かって左側の奥の配置となる傾向が強い。特に、国道 20 号沿いや、甲州街道の主要道路沿いに、この傾向が見られた。

(6)看板・のぼりの特徴

看板・のぼりの付属物は、乱雑な景観を印象付ける要素である。色彩は、ピンク、紫、緑、黄色等の際立つ色彩のものが多い。写真 6 のように独立袖看板、壁面看板、屋上看板、ぶどう棚梁の看板、立て看板、旗看板と様々な種類の看板が設置されている。また、売店と同様に車の進行方向から見えるようになっている。

写真 6. 看板、のぼり

5. おわりに

(1)今の観光ぶどう園の景観は、観光客を惹き付ける構成要素、色彩、敷地配置となっている。特に、際立った色合いの支柱、看板・のぼり、売店や、看板・のぼりは、車から見て、進行方向にあり、道路に見せる景観となっている。

(2)多くの観光ぶどう園が、敷地配置から見ると、勝沼に古くからあるぶどう農家の敷地配置に似ている。しかし、構成要素を見ると大きな構造のぶどう棚、仮設建築的な売店や、看板・のぼりなど新しい要素が入ってきており、伝統的ぶどう農家の景観とは異なる。

6. 今後の課題

今回の研究で、伝統的ぶどう農家と観光ぶどう園との間に共通点がある事が分かった。しかし、伝統的ぶどう農家は、落ち着いた農村景観の要素をもっているのに対し、観光ぶどう園は、際立つ色彩の看板・のぼり、支柱などから、景観に対しての意識が薄いと思われる。伝統的ぶどう農家の特徴は、勝沼町らしい観光ぶどう園の景観づくりの啓発に役立つと考えられ、今後、その特徴を把握する事が必要である。

参考文献

1)「えびかずら」文化協会誌　勝沼町文化協会
2)「庭と道」［住環境の屋外空間］岡田威海